

伝統芸能における身体技法の教授の場を考える

小塩 さとみ(宮城教育大学)
金光 真理子(横浜国立大学)
増野 亜子(東京藝術大学)
山本 百合子(福岡教育大学)

芸能を教え伝えることは身体技法を教授することである。音楽であれ舞踊であれ、学習者が曲を習う時には、旋律やリズムや踊りの振り等とともに身体の使い方を覚えていく。身につけた身体技法は鑑賞の基盤としても機能する。音楽や芸能を理解する上で身体技法は欠くことができない要素である。

身体技法の教授法は音楽文化や芸能ジャンルによってどう異なるのか。教授者と学習者が対面する伝統的な稽古の場と、ワークショップや学校の授業等の新しい教授の場で、身体技法の教授に関する意識に違いはあるのか。本発表はこのような問題意識に基づいて2019年より実施している科研費研究の中間報告である。新型コロナウイルスの感染拡大により芸能の教授の場は大きく変化した。このコロナ状況下の教授の在り方も含めて報告を行う。

冒頭で発表の枠組を示した後、まず山本が「島原子ども狂言」(長崎県島原市)の活動を紹介する。教習内容や方法の特色に加え、地域社会の人材育成との関わりやコロナ状況下での課題を報告し、日本の伝統芸能が何を伝承し生み出そうとしているのかを考察する。

次に小塩が宮城県仙台市で毎年夏に実施される「こども能狂言」の活動と勤務校である宮城教育大学でのガムランの授業について報告する。未経験者を主たる対象とした短期間の教授プログラムにおいて何が重視されるのかを検討する。

続いて増野がコロナ状況下の日本におけるインドネシアの音楽・舞踊の教授状況を報告する。大学の実技授業と民間レッスン、オンラインと対面、ガムランと舞踊、ジャワ芸能とバリ芸能等、複数の側面から指導者の取り組みについて考える。

最後に金光が科研費グループとして2020年秋に実施した「大学のオンライン実技授業座談会」の報告を行う。8回の座談会で語られたさまざまな実践例を整理して紹介し、オンライン化で再認識される学びの身体性や身体技法の教習の新たな可能性について考える。